

## 生息場所

高岡市与茂九郎池のから流れ出す水路及び小川で、採集当時は、コンクリートで固められた部分と土のままの部分が混在したが、コンクリート部分に多くの個体が確認された。水深は2-5cmで、スジエビが多産したほかは、目立った動物は確認できなかった。

## 議 論

高岡市与茂九郎池周辺の標本についてその付属肢を解剖した。この標本は従来最も重要な分類形質とされていた、顎脚ひげと第1顎脚の剛毛の形態等から見ると韓国のNaktong RiverからKwonとKimらにより、報告されているチョウセンコップムシ *Gnorimosphaeroma naktongense* の原記載に最もよく合う。しかし、高岡標本は(1)より第2触角の鞭数が少ないこと、(2)顎脚ひげの剛毛の数が少ないこと、(3)腹肢の周辺の剛毛の数が少ないこと、(4)腹肢原節の交尾鉤の数が少ないこと、(5)尾肢各節がやや細いこと、(6)第1胸肢前節の太い剛毛の数が少ないこと(7)第2小顎の剛毛数が少ない等の違いが見いだされる。したがって、現時点で高岡産標本が *G.naktongense* と同定していいかどうかの判断はできない。少なくとも多くの日本各地並びに環日本海地域のの標本との対比が是非必要である。概して *naktongense* より、剛毛が少ないことなどからより進化したものである可能性もうかがわれる、なお、新潟県岩船郡神林村立平林中学校文化部科学研究班によって詳細に研究された同県中条町の湧泉群から採集された標本についても *naktongense* とされている(平林中学1995)。

また、淡水コップムシが日本海側の淡水域にもっぱら分布するという事実から次のような仮説を提案する。すなわち、元来海産種だった本種の祖先が、第四紀の水期に日本海が淡水湖化し、それに適応して淡水種に進化したものが、現在のように日本海が鹹水になって、河川などの淡水域に閉じ

こめられたものではないだろうかというものである。

今後、淡水もしくは汽水域でこのようなコップムシを見かけられたら、提供いたでければ幸甚です。

## 参 考 文 献

- Kim H.S. and D.H.Kwon 1985. The Systematic Study of the Family Sphaeromatidae (Crustracea, Isopoda, Flabellifera) from Korea Inje Jour.1(2):143-165.
- Kim,H.S and DH. Kwon 1988. Marine Isopod Crustaceans form Cheju Island, Korea. Inje Jour.4(1):195-220.
- Kwon,J. and D.H.Kwon, 1993. A New Species genus *Gnorimosphaeroma* of the (Crustacea, Isopoda, Sphaeromatidae) from Brackish water lake in Korea. Korean J.zool.36: 402-407.
- Kwon,D.H.and H.S.Kim 1987. A new species of the Genus *Gnorimosphaeroma*(Crustacea Isopoda, Sphaeromatidae) from the Naktong River with a key to the Korean Species of the genus. The Korean Jour. Syst.Zool. 3(1)51-53.
- 布村昇,1995.等脚目。(西村三郎編原色検索日本海岸動物図鑑Ⅱ).205-233.
- Richardson,1905.A monograph on the North America. Bull. U. S. Nat. Hist.Mus.541-724.
- 小泉顕雄・恩藤芳典. 1975. 淡水産コップムシの生態学研究. 鳥取大学教育学部報告26:7-12.
- 小泉顕雄.1987a淡水産コップムシの話(その1). 兵庫陸水生物26:1-2.
- 小泉顕雄.1987b淡水産コップムシの話(その2) 兵庫陸水生物27:152.
- 新潟県岩船郡神林村立平林中学校文化部科学研究班1995淡水産コップムシの研究科学研究集録.

## 富山県の淡水魚の生活型による区分(予報)

南部久男

富山市科学文化センター

Division of Life Cycle of Freshwater Fishes in Toyama Prefecture

Hisao Nambu

Toyama Science Museum

淡水域に出現する魚類には、一生を淡水で生活する魚や海と行き来する回遊魚等があり、その生活型は様々である。魚類の生活型と淡水域の特徴とは密接な関係があると思われ、魚類調査の際には、出現した淡水魚の生活型を分類することは大きなことと思われる。しかしながら、ヤマメのように同種内でも地域や個体によって生活型が異なる場合や、海水に生息する魚類が淡水域に入り込む場合等があり、その生活型の分類は困難なことがある。今回、富山県の淡水魚について、生活型による区分を試みた。区分を行う場合、生活史の正確な解明が必要であるが、十分な調査が行われていない魚種が多い。このため、今回の区分は、一部の魚種については、暫定的、経験的な一面があると思われるが、正確な区分は、各魚種の富山における今後の正確な生活史が明らかになるのを待たなければならない。また、移入種の進入や、河口域の調査により、富山県の淡水域に出現する魚種は増加すると思われ、その都度判断しなければならぬ。このような事情により、今回の報告は予報的なものである。

本報告をまとめるにあたり、富山大学教育学部長田中晋氏、魚津市水産課稲村修氏には、貴重な御教示を賜りました。厚くお礼申し上げます。

### 生活型の区分

ここで言う淡水魚とは、「河口を含めた河川や湖沼に出現する魚」として扱った。扱った魚種は、田中編(1993)による、富山県内の淡水域(河口を含む河川、湖沼)で記録された魚種である(表1)。生活型からみた淡水魚の区分は、川那部監

修(1987)のフィールド図鑑淡水魚によったが、回遊魚の説明は塚本(1994)によった。これらによると次のように、説明されている。

- ・純淡水魚：一生を淡水域で過ごす。
  - ・回遊魚(通し回遊魚)：川と海を行き来する。
  - ・周縁魚：生活の大部分を海で過ごす沿岸魚で、一時的に淡水域に入り込む。
  - ・汽水魚：一生の大部分を河口から高感潮域で過ごす。
- さらに、川那部監修(1987)では、回遊魚は次のように分類されている。
- ・降河回遊魚：海で生まれ、淡水で成長したのち再び産卵のために海に下る。
  - ・溯河回遊魚：淡水で生まれ、しばらく淡水で過ごした後に、海に下って成長し、産卵のために再び淡水に戻る。
  - ・両側回遊魚：淡水で生まれるとすぐに海へ下り、しばらく海で過ごした後、淡水に戻って成長し産卵する。

富山県で記録のある94種について生活型から分類を試みた結果、純淡水魚は49種、回遊魚は18種、周縁魚は、13種、汽水魚は8種であった。同一種で、生活型が重複すると考えられる「純淡水魚・回遊魚」は5種、「回遊魚・純淡水魚」は2種、「純淡水魚・汽水魚」はシンジコハゼ1種であった。在来種(表1の\*以外)に限ると、純淡水魚は26種、回遊魚は17種、周縁魚は、13種、汽水魚は8種であった。また、同一種で、生活型が重複すると考えられる「純淡水魚・回遊魚」は5種、

表1 富山県の淡水魚の生活型からみた分類

科名	和名	生活型による分類
ヤツメウナギ科	カワヤツメ	回遊魚(溯河)
ニシン科	スナヤツメ	純淡水魚
	サツパ	周縁魚
	コノシロ	周縁魚
ウナギ科	ウナギ	回遊魚(降河)
キュウリウオ科	*ワカサギ	回遊魚(降河)
アユ科	アユ	回遊魚(両側)
サケ科	イワナ	純淡水魚・回遊魚
	●*カワマス	純淡水魚
コイ科	?*ブラウントラウト	純淡水魚
	ニジマス	純淡水魚
	サクラマス(ヤマメ)	回遊魚・純淡水魚
	?*サツキマス(アマゴ)	回遊魚・純淡水魚
	サケ(シロザケ)	回遊魚(溯河)
	?*ベニザケ(ヒメマス)	純淡水魚
	アカヒレタビラ	純淡水魚
	ヤリタナゴ	純淡水魚
	イタセンバラ	純淡水魚
	*タイリクバラタナゴ	純淡水魚
	●*アブラヒガイ	純淡水魚
	●*ビワヒガイ	純淡水魚
	カマツカ	純淡水魚
	*ニゴイ	純淡水魚
	タモロコ	純淡水魚
	●*ホンモロコ	純淡水魚
	●*イトモロコ	純淡水魚
	モツゴ	純淡水魚
	ウグイ	純淡水魚・回遊魚
	マルタウグイ	回遊魚(溯河)
アブラハヤ	純淡水魚	
タカハヤ	純淡水魚	
*オイカワ	純淡水魚	
カワムツB型	純淡水魚	
?*ハス	純淡水魚	
●*ワタカ	純淡水魚	
(キンブナ)	純淡水魚	
ギンブナ	純淡水魚	
*ニゴロブナ	純淡水魚	
*ゲンゴロウブナ	純淡水魚	
コイ	純淡水魚	
*ソウギョ	純淡水魚	
*ハクレン	純淡水魚	
ドジョウ科	ドジョウ	純淡水魚
	シマドジョウ	純淡水魚
	アジメドジョウ	純淡水魚
	●ホトケドジョウ	純淡水魚
ヘラナマズ科	?*チャンネルキャットフィッシュ	純淡水魚
ナマズ科	ナマズ	純淡水魚

ギギ科	?*ギギ	純淡水魚
アカザ科	アカザ	純淡水魚
メダカ科	メダカ	純淡水魚
トゲウオ科	*グッピー	純淡水魚
	イトヨ(降海型)	回遊魚(溯河)
	トミヨ	純淡水魚
ボラ科	ボラ	周縁魚
	メナダ	汽水魚
	セスジボラ	汽水魚
タイワンドジョウ科	*カムルチー	純淡水魚
サンフィッシュ科	*オオクチバス	純淡水魚
キス科	ブルーギル	純淡水魚
	シロギス	周縁魚
ヒイラギ科	ヒイラギ	周縁魚
イサキ科	イサキ	周縁魚
シマイサキ科	シマイサキ	周縁魚
タイ科	クロダイ	周縁魚
ウミタナゴ科	ウミタナゴ	周縁魚
カワスズメ科	?*ナイルテラピア	純淡水魚
ハゼ科	ドンコ	純淡水魚
	ゴクラクハゼ	回遊魚(両側)
	シマヨシノボリ	回遊魚(両側)
	クロヨシノボリ	回遊魚(両側)
	オオヨシノボリ	回遊魚(両側)
	ルリヨシノボリ	回遊魚(両側)
	トウヨシノボリ	回遊魚(両側)
	カワヨシノボリ	回遊魚(両側)・純淡水魚
	ヌマチチブ	純淡水魚
	ウロハゼ	回遊魚(両側)
	ビリンゴ	周縁魚
	ジュズカケハゼ	汽水魚
	シンジコハゼ	純淡水魚
	ウキゴリ	純淡水魚・汽水魚
	シマウキゴリ	回遊魚(両側)
	スミウキゴリ	回遊魚(両側)
	マハゼ	回遊魚(両側)
	アシシロハゼ	汽水魚
	ミミズハゼ	汽水魚
	シロウオ	回遊魚(溯河)
カジカ科	カマキリ(アユカケ)	回遊魚(降河)
	カジカ	純淡水魚・回遊魚
	カンキョウカジカ	回遊魚
ヒラメ科	ヒラメ	周縁魚
カレイ科	ヌマガレイ	周縁魚
フグ科	クサフグ	周縁魚
タウナギ科	?*タウナギ	純淡水魚

<和名についている印の説明>

- 富山県で記録されたが、現存していないと考えられる種。
  - \* 他地域からの移入種。
  - ? 富山県の河川・湖沼で繁殖しているかどうか不明。
- (注) 同一種で、生活型が重複する場合は並記した。

「回遊魚・純淡水魚」は1種、「純淡水魚・汽水魚」はシンジコハゼ1種であった。

### 参考文献

塚本勝己, 1994. 通し回遊魚の生活史と分布. pp. 280. 東海大学出版会.  
後藤 晃, 塚本勝己, 前川光司編, 川と海を回遊

する淡水魚「生活史と進化」, pp. 2-17, 東海大学出版会.

川那部浩哉監修, 1987. フィールド図鑑淡水魚. pp. 186. 東海大学出版会.

田中晋編, 1993. とやまの川と湖の魚たち. pp. 287. シーエーピー.

(1995年12月31日受理)

## 常願寺川グミ原の土壤動物の予備的調査

布村 昇、宮本 望、平内好子

富山市科学文化センター・富山市梅沢町1-4-17・富山県立新川女子高校

Preliminary Report on the Fauna of Soil Animals in *Elaeagnus umbellata* shrub in Jyoganji River, Toyama Prefecture

Noboru Nunomura・Toyama Science Museum  
Nozomu Miyamoto・Umezawa-cho 1-4-17, Toyama City  
Yoshiko Hirauchi・Niikawa-jyoshi High School

常願寺川には日本最大のアキグミの原がある。これは常願寺川は絶えず、氾濫をくりかえし、暴れ川であるが故に、アキグミの原が出現しているもので、たいへん特徴的なものと思われる。そこにすむ生物相を明らかにして、その生態系の研究に貢献することが必要と思われる、そこにすむ土壤動物の調査を予備的に試みた。

もとよりこの広大な地域の土壤動物相を調査し、その大勢を判明させるには多大な時間を要するが、この重要で興味深い生態系の一端を理解するための第一歩として予備調査を行い、調査品を同定し、また県外の専門家の同定を仰いだので記録

しておく。

予備的に調査したこの結果がどれほどの意味を持つか疑問であるが、これを契機に少しでも多くの調査や研究が行われることを期待して、データを記録しておく。以下、特に断っていないものは全てアキグミ林である。

なお、宮本は宮本望、布村は布村昇、平内は平内好子、太田は太田道人の採集もしくは確認を示す。また、見つけ取りの他、布村もしくは平内がツルグレン装置により、抽出したものもある。中型土壤動物には、確認個体の記していないものもある。

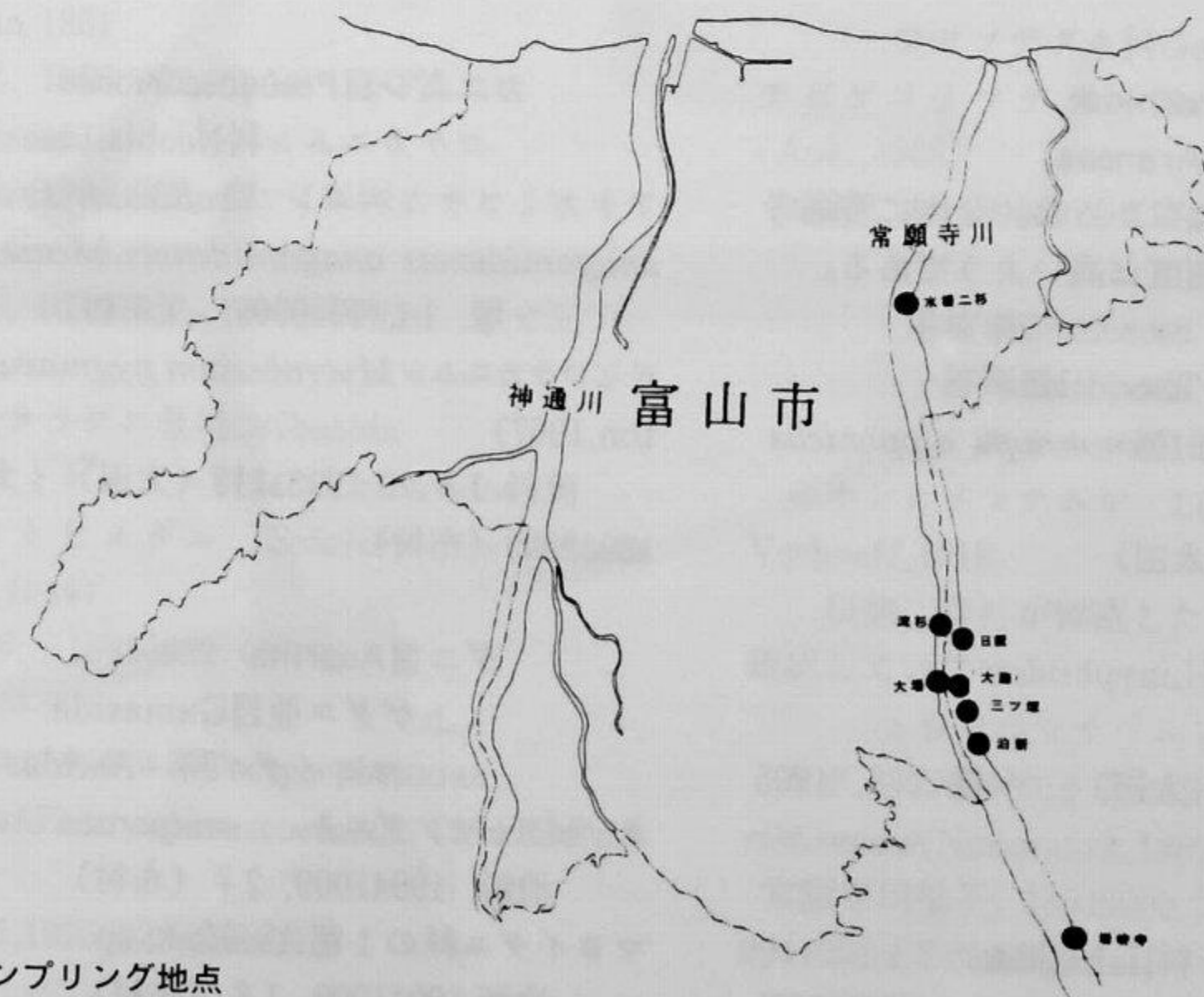


図1. サンプルング地点